入江祝衛の辞書*

外国語共通教育センター 土肥 一夫

1 はじめに

過去約十年間に英国の主要な出版社が外国人英語学習者向けコロケーション辞典(連語辞典)を発行した。この状況は現代における発信型辞典の役割の強化を明示している (cf. Longman Language Activator 1993)。しかし、本邦における英語の辞典の歴史を振り返ると、外国語としての英語を使用し発信する著作の刊行は二十世期に既に見られることを拙稿(2012)で言及した。

本稿は、従来必ずしも正当に評価されず、辞典の世界で埋もれた存在である入江祝衛 (1866 - 1929) が編纂した辞典を史的に遡り、連語辞典に寄与した功績の評価が目的である。 ちなみに、入江に関する言及は保泉 (1952) が最初と考えられ、竹井 (1983、1987) を経て、井上 (2012) が出版されたことも拙稿の一因である。

2 入江の関与した辞典

入江を正式な編者に挙げる辞典は五冊である。⁽¹⁾ 保泉(1952:39)は入江の外国語辞典の第一作は三省堂の『和独辞典』(1903)とするが、『三省堂書店百年史』(1981)に言及はなく、現在検証可能な独語の著作は恩師クンツェとの共著の入江(1903)である。⁽²⁾ 入江が関わったとされるのは次章の和英辞典であるが、期間を考慮すれば校正のみと考えるのが妥当と思われる。独語だけでなく英語にも堪能な入江が(辻村鑑氏と助手で)校正を担当しそれなりの貢献があっても、拙稿(2014)で言及した河村重治郎のように、著名人が編集主幹とされ個人名が明記されない可能性は極めて高い。

3 『新式日英辞典』(1905)

入江が編纂した和英辞典には後述の『註解和英新辞典』があるが、『新式和英辞典』(以下『新式』と略記)は入江が「辞書編纂苦心談」(1925)⁽³⁾ (永嶋 1985:27) で関与を認める最初の英語の辞書である。英語のタイトルは A Japanese-English Dictionary では Preface で次のように述べている。

The aim of the present work has been to meet all the requirements of Japanese students of English. Not only all the common words in literary and conversational Japanese, but numerous technical terms of which every student must needs know their English equivalents, have also been included. (原文のまま)

アイウエオ順の見出し語をアルファベット表記し、対訳の相当語句を列挙し、用例はほとんどない。「おおいに江湖に歓迎せられ、学界の大喝采を博したる」と斉藤 (1991:102) が評したブリンクリー他『和英大辞典』 (1896) を参照し編纂したことが二者の比較から明確となる。 (例:後述の Itami 参照。) 三省堂編輯所顧問であった高楠を中心に、入江が一年

足らずで校正を終了したのは、関与を最小限にとどめたからであろう (cf. 保泉 1952:39)。 しかし、筆者がこの辞書で注目するのは本文ではなく補遺である。高楠が関与した同社の『新 訳英和辞典』(1902) にも付した「不規則動詞変化表」も補遺の一つであるが、当時の英和 辞典では特別ではなかった。

とりわけ注目に値するのは Words used in connection with various prepositions と表記 される14ページの補遺である。アルファベット順に配列し、中核となる名詞、形容詞、動 詞さらに副詞と、それに後置される前置詞が明示されたリストである。A の Angry at (a thing), with (a person) や Apologise to (a person), for (rudeness) が一例である。ちなみに、 『新式』の本文の Ayamaru(謝罪)の項では apologise (for) が記載されるが apologise to a person はなく、一方 angry に対応する Okoru(怒、憤)で to get angry、また Ikaru(怒) は to be angry とのみ記述され前置詞の記述に関して一貫性は見られない。前置詞は明治初 期から日本人英語学習者の弱点の一項目で、二十世紀前後の前置詞に関する著作には中原 (1898) や Eastlake (1905) 等があり、その詳細な記述は発信の視点からは極めて重要であ る。しかし、『新式』の本文では前置詞に関する詳細な記述はほとんど見られない。編者と される新渡戸や高楠がこの補遺を草案したと考えにくいが、この補遺の重要性はその後の展 開を考慮すると無視できない。後述の『詳解英和辞典』の附録にも同類のリストが記載され た事実を考慮すると、『新式』の補遺は入江が校正中に新設したと推測される。現在では文 法的連語(grammatical collocation)と類別される連語である。和英辞典の補遺でのこの種 の記述は従来の慣習を打ち破る新機軸ではあるが、その活用の度合いと有効性は不明瞭であ る。このように編者が重要と判断する見出し語に関する前置詞を補遺で記述した原点は『新 式』と考えられるが、和英辞典に取り込んだ入江の先見性が再認識される。発信上の重要性 と日本人の弱点を意識していたためと考えられる。

4 『註解和英新辞典』(1907) と『袖珍和英辞典』(1914)

『註解和英新辞典』(以下では『註解』と略記)の英語タイトルは A New Critical Japanese-English Dictionary で山口造酒との共著である。(入江は共著では共著者名を必ず先に表記している。)独語の著作が多い山口は入江と同様に英語にも通じており、東北学院で知り合ったことが一因であろう(竹井 1987:31)。『註解』は入江の和英辞典の出発点で、『和英大辞典』『新式』とは異なり、日本語表現にできる限り多くの英語相当語句を列挙し、「我ナガラ驚ク程ノ大成功」(永嶋 1985:28)を収めた。『袖珍和英辞典』(以下では『袖珍』と略記)は Yuhodo's Pocket Japanese-English Dictionary のタイトルで、オースチン・メドレーとの共編である(cf. 永嶋 1985:41)。

『和英大辞典』『新式』と『註解』『袖珍』の記述を比較すると異なりが明確である。前二者も後二者もそれぞれ親版と縮約版と見なせるが、後二者は新たに編纂されたとわかる。本稿では二例の関連記述を挙げる。

例 1 Fune (船)

『和英大』A general name for steamers and sailing vessels.(これは対訳語句に相当しない) 『新式』a ship 『註解』A ship; [短艇] a boat;[短艇ヨリ大ナルモノ] a vessel.

a four-funneled boat/ to go in board a ship; to get on board; to go aboard a ship; to go on board a ship; to take ship/ to move a ship forward/ to be sea-sick/ The ship is riding at anchor/ They ran the ship on a sunken rock/ Are you going by boat?/ I get sick when the ship rolls/ There were many men killed when that ship was launched/ We have to take ship in going to Shikoku

『袖珍』A ship; [短舟] a boat;[短舟ヨリ大ナル] a vessel.

to go on board a ship; go aboard a ship; take ship/ to be (get) sea-sick/ to go by ship (boat, steamer)/ The ship is riding at anchor/ They ran the ship on a sunken rock/ We have to take ship in going to Shikoku

例 2 Itami (痛み)

『和英大』n. Pain; injury; hurt; damage.

『新式』n. Pain; hurt; injury; damage.

『註解』n. Pain; [痛苦] suffering; [緩痛] ache; [短ク強キ] pang; [チクチク痛キ] smart; [損傷] injury; hurt: 傷を紛ぎらす to ease pain. 傷を緩るめる to ease pain; to relieve pain.

『袖珍』n. Pain; [緩痛] ache; [短強ノ] pang; [チクチク痛] smart; [損傷] injury; hurt: 傷を緩るめる to ease (relieve) pain. 歯が痛みます I have toothache.

『新式』の校正をする過程で入江は記述の不十分さに気付き、和英辞典を編纂するに当たり日本人学習者にとり不可欠な表現をできる限り網羅しようとしたと考えられる。山口を編纂協力者に招き、後の『袖珍』ではネイティブスピーカーにチェックを依頼し編纂したと考えられる。入江自身の外国語学習でネイティブスピーカーの存在は無視できない存在であったことは「辞書編纂苦心談」から明確である。『註解』の編纂は後の『英文法辞典』の編纂へ繋がるきっかけとなった。上記の例では語彙的連語(lexical collocation)として目的語にpainを取る動詞が焦点になる。この項で動詞と名詞の連語の記述は十分でなく、形容詞と名詞、名詞と動詞、名詞と前置詞等の連語の記述はない。ページの制約、記述対象の収録語数等も絡み、どの程度の記述を考えていたか不明瞭である。後述の『英文法辞典』の諸言では「約十年前」に思いついたと記していることから、『新式』の校正をきっかけに『註解』を経て、入江の考える基本語の記述の重要性に対する認識が強化されたと考えられる。それが開花したのが『英文法辞典』であった。拙稿(2012)で言及したように、明治期から大正期に英語を学習した勝俣と同様に、英語による発信は入江自身の経験から最も基本的と認識されていたと考えられる。

しかし、『新式』『註解』と同時期に出版された『実用和英新辞典』(1906)を比較対象の一例として参照し Itami の用例のみを挙げる。最初の四語は『和英大辞典』の影響が考えられるが、『註解』より豊富な用例を示している(Fune の項も同様である)。

Itami Pain; injury; hurt; damage. The *pain* has been relieved; the *pain* has disappeared; the *pain* has left./ tooth-ache/ headache/ fearful, terrible, *or* agonizing *pain*/ an unendurable, insufferable, *or* insupportable *pain*/ The *pain* is a little easier/ the *damages* to books

このように、二十世紀初頭に日本語に対応する英語を記述する際に、連語は潜在意識下にあったと考えても不思議ではない。しかし、日本語を主体とし対応する英語表現を網羅することが主たる目的であったと思われる。

早川(2014)が指摘するように、アルファベット順の見出し語に関連する熟語を集めた 著作としては斎藤(1886)がある。例えば pain(単数形)の項で To be in ---/ To feel ---/ To suffer ---/ Under --- of death の用例がある。boat では 名詞の付く複合語を除くと To go into a---/ To fasten a --- の二例、ship では To go on board a ---/ Aboard a ---/ To take--- を示している。連語という概念は存在しないが、このように語に関する多様な記述は遅くとも明治期中期には試行されていた。

熟語の記述で最も組織的な記述は勝俣が初期に編纂に関与した神田・南日(1909)に見られ、勝俣は自身の著作(1911)等を経て勝俣(1939)で英語の連語表現の集大成の編纂へと至る。この期間に勝俣は資料収集と整理を実践していた。二十世紀初頭での資料取集とそれに基づく辞書の編纂という共通の事象が勝俣と入江に見られることは興味深い。当時の英語編纂者は収集資料を有効活用し発信のための編纂を試行した。その点で、入江が『英文法辞典』(改称『英作文辞典』)を刊行し、その成果を世に問うたのが勝俣より時期は四半世紀早かった。その点で連語辞典の草分けと見なすことができるが、後述するように組織的でなく整理が不十分で、肝心な用例も不十分で、使用しやすさの評価は不確かである。しかし、戦前戦後を通じて頻繁に発行されている事実から、好意的な評価を受けていたと考えても不自然ではない。

5 『詳解英和辞典』(1912)

「数百冊ノ参考書ヲ…参考シテ出来タ」(永嶋 1985:28)『詳解英和辞典』(以下では『詳解』と略記)の英語のタイトルは A New English-Japanese Dictionary で、1917 年 9 月の第 10 版 (10 刷)まで確認可能である。実弟の創設した賞文館が発行し、博育堂が発売所となり、その後に有朋堂から出版された。⁽⁴⁾ 既述の『註解』と『袖珍』を挟む時期に公刊され、語学的で英和辞典の「白眉」と称される(永嶋 1970:180)。ポケット版ながら詳細な情報を詰め込んでいるが、例えば economic が見出し語で economy が派生語であるかのように記述され単純なアルファベット順でないため検索は不便で、同時期に刊行された神田乃武他『模範英和辞典』(1911)、後に出版された斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』(1915)という当時の英語教育界の著名な大家が編纂にかかわった二辞書(さらに井上十吉『井上英和大辞典』(1915)に埋もれ販売数が伸びない不測の事態に遭遇し決して順風でなかったとされる(cf. 井上 2012:187)。文法書と同等の記述が見られる見出し語もあり、語学的記述が強化され、『英文法辞典』へ結実する一因ともなった。

『詳解』の ache, pain と boat, ship の記述を比較する。語義は割愛し該当語義での用例を示す。下記の記述からは用例に関して一貫性が欠如しているとわかる。さらに『註解』と『詳解』とは異なる目的を持つため必ずしも用例が同一ではないとわかる。下記の例ではアステリスク付きの用例が二者に共通した例である。『詳解』の例は不要とは言えないが、『註解』は少数例ながら動詞と名詞の連語を示し有益性は高い。しかし、『詳解』の一部の用例から

受信においても見出し語に関する連語の重要性を入江が認識し記載したと考えられる。英和辞典は他辞書との競合で見出し語数を多くする傾向が強く、語義や用例等はスペースの制約で限定せざるを得ないが、選択の判断は甚だ困難なことが多く、編者の経験と主観に依存する割合が高く、良し悪しを容易には評価できない(波線に該当する見出し語が入る)。

ache n. an \sim in one's head

pain n. The \sim is hard to bear; a \sim in one's head

boat n. 用例なし

ship n. to charter a \sim ; to clear a \sim ; to dress a \sim ; to drive a \sim ; * to go by \sim ; to heave a \sim to; to pump \sim ; to speak a \sim ; * to take a \sim ; to wind a \sim

『詳解』は本文 1427 ページ、補遺 255 ページに不規則動詞表 (8 ページ)、形容詞比較要覧 (8 ページ強)、前置詞用法 (17 - 59 ページに約 42 ページ)、英語常用他国語句 (59 - 94 ページ)、略語解 (94 - 127 ページ)、接頭語接尾語及根語略解 (127 - 161 ページ)、外国地名用語略解 (161 - 168 ページ)、外国地名人名要覧 (169 - 248 ページ)、外国貨幣及度量衡表 (248 - 255 ページ)を含む。当時競合する『模範英和辞典』の附録にないのは動詞変化表、形容詞活用一覧、接頭語接尾語一覧であるが、とりわけ特徴的なのは前置詞用法の一覧である。これは『新式』の補遺の Words used in connection with various prepositions の増補改 訂版と考えられる。アルファベット別に『詳解』と『新式』の項目数を比較し、その結果を表1に示す。先の数字は『詳解』の項目数で、カッコ内の数字が『新式』の項目数である。

A	313 (159)	B 100 (52)	C 271 (170)	D 178 (116)	E 119 (78)
F	77 (44)	G 44 (24)	H 47 (29)	I 166 (122)	J 13 (10)
K	11 (5)	L 52 (37)	M 48 (28)	N 20 (10)	0 46 (40)
Р	177 (117)	Q 6 (10)	R 97 (93)	S 219 (109)	T 69 (39)
U	11 (7)	V 21 (13)	W 47 (17)	Y 3 (2)	Z 2 (3)

表1 前置詞用法の項目数の比較

『新式』で1334 語、『詳解』では2157 語で前置詞の文法的連語を記している。ページは三倍増となり対象とする語も6割以上増加した。入江が『新式』の動詞、名詞、形容詞と副詞に後置される前置詞に強い関心を寄せていたとわかる。後述の『英文法辞典』の編纂にも関与する事項である。しかし、『詳解』の本文では必ずしも明示的に記載していない。英和辞典では受信における語義の提示が念頭にあったためと推測される。

6 『英文法辞典』(1915)

『英文法辞典』⁽⁵⁾ は A Grammatical Dictionary of the English language が英語のタイトルで、1915年9月に博育堂から刊行された。記述対象は表現に不可欠な内容語の名詞、動詞、形容詞と副詞であるが、その他に冠詞(a, the)、限定詞(all, every)、代名詞 (itself, mine)、助動詞(can, would)、接続詞 (because, or)、関係詞 (that, where)、前置詞(by, in)、間投詞(oh)と勝俣よりかなり広範囲にわたる。高頻度の語と扱う品詞による文法的かつ語彙的に適切な

連語の提示のため入江が編纂した辞典である。結果的に、内容語に関しては連語の概念が適応できる記述を試行したと考えられる。この辞典の見出し語は『詳解』(補遺)(前置詞用法)にリストされた語との重複がある可能性があると考え、両者の差異を『英文法辞典』のe (each ~ elope)と o (O ~ of)の見出し語 50 語で比較した。表 2 の結果から、『英文法辞典』の見出し語は『詳解』(補遺)を利用し増補改訂したと考えられる。

	Е	0
両者に共通の見出し語	14	21
『英文法辞典』のみの見出し語	35	29
『詳解』(補遺)のみの見出し語	1	0

表2 『詳解英和辞典』と『英文法辞典』の項目数の比較

入江は刊行の趣旨を「諸言」で次のように述べている。

「我々が英文を作らんとする時に一つの語を用ゐれば同時に其前後に文法關係を生じ極めて簡易なる語にても使用上の困難を感ずることあるは多くの人の自ら經驗して熟知せる所である斯かる場合に文典を参考せんとするに此れは大體の原則を説きて一々の語の用法を教ふるものでなく偶ま附しある索引も極めて簡單なれば迅速の用はなさゞるが常である…平生多く使用せらるゝ語の大體の用法を一覧し得るものあらば第一自分に最も便利であるといふのが抑も此辭書の成る原因である而して種々考究の末やうやく本書の如き組織に思付きたるは今より約十年前なるが爾來聊も注意を怠らず中途註解和英辭典詳解英和辭典袖珍和英辭典の三辭典を公にせしが此等方面の材料を蒐むる時にも本辭書の事は片時も忘れたること無かりし」(p.1)

「…實用は無論作文にあれども全篇を貫通せる精神は語の文法關係を示さんとするに在り換言すれば文法は説かねど文法を示さんとするに在るから敢えて不可なしと信ず」(p.2) この諸言の後に作文本位として宣伝していること、また索引がないことを追記している。

入江は日本人が英文を書くのに用いる語は「前後に文法關係を生じ」と述べているが、文法的連語か語彙的連語かは明確ではないが、本書の用例からは二者を含んでいると判断される。例えば既述四語で最小例の示される ache では下記の記述が示される(改訂版では品詞別の用例に整理されている)。

an ache in the ear, My eyes ache, My head aches, My heart aches, an ache in a tooth, My tooth aches, my whole body aching with weariness

用例から不定冠詞付き可算名詞であり、身体部を示す名詞が後置される際に前置詞は in が用いられ、抽象名詞が後置される際は with を用い、動詞用法の主語は無生物(身体部)であることを明示しようとしている。身体部を主語とする類例が多いが、基本語の用法を用例を通して学習させる手法で、品詞表示の他には(古)、(俗)、(詩)のスタイルレーベルと(英)、(米)の地域レーベルのみである。書き言葉の用例が主であるが、(俗)に対峙するフォーマルのレーベルはない。しかし、本文中にこのレーベルが表示されていることはなく、その

意義は不可解である。『詳解』では「略字解」で数多くのレーベルの説明があり、使用していることを考慮すると、本書での表記は意味がない。

ここで、pain (名詞) の用例の一部を挙げておく。①~⑥は説明の都合の分類である。① an acute (or a sharp), a severe, a shooting, a slight, a sudden, a violent pain/②④ This ointment will allay (or soothe, relieve) the pain/③ She suffers greatly from a pain in the back/② The pain is still almost more than she can bear/②③ have a pain in (or about) my chest/① a continued pain, to be in continued pain/⑤ He cries with pain/③ a pain in the ear/② to ease the pain; to endure the pain/①③ a throbbing pain in my eye/② I felt a pain/② His wound gave (or caused) him great pain/④ To my great relief the pain is gone/①③ an internal pain in the head, a pain affecting only one half of the head/②
③ I feel a pain in my head/⑤ He is in (great) pain; Are you always in pain?/④ The pain leaves him for a time/③ He has been complaining of a pain in the lungs for some time past/⑤ He was mad with pain; This pain is enough to drive one mad/①③ a severe pain in the nerves/③ a pain in the nose/① I feel a prickling pain on the tip of my tongue/② This remedy will relieve the pain; The physician relieved him of his pains/② to remove pain/②③ He has a pain in his side; I have a pain in my (or the) stomach/② The medicine has soothed my pain/② to suffer pain

上記の用例で名詞 (pain) に関して、①形容詞+名詞、②動詞+目的語(名詞)、③名詞+前置詞、④主語(名詞)+動詞、⑤前置詞+名詞の用法を提示し、必ずしも明示的ではないが現代の連語辞典で扱う語彙的かつ文法的連語を提示している。入江は諸言で「蒐りたるカードの數實に三十萬枚を超過する」と自身で収集した用例を「昨秋以来淘汰整理に着手し今や漸く現代の如き形のものとなすを得るに至つた」と述べている。短期間での資料整理による編集作業が必ずしも適切に機能していないため上記のようなボールドで示したアルファベット順による混沌とした情報が提供されていることが惜しまれる。

入江は「諸言」に先行する「凡例」で「作文の際に語の文法關係を最も迅速に知り得るやうになつて居る…何れが適當なるか。各例中の黑文字を頼つて探しなば何か適當の言ひ方の見出さるゝ仕組みになつてゐる此黑文字は字體頗る見取り易きのみならず大體字母順に排列しあるが故に檢索には極めて便利である。イタリックにて示したるは前置詞接續詞冠詞等の用法中特に注意を要するものである。或主格に用ひる形容詞動詞また或形容詞動詞の取る主格は日常大抵極まり居るからそれ等の事も分かるやうになつてゐる」と述べてが、単にアルファベット順による提示が使用者に親切かという問題とは別であることは上述例から明確である。

入江のイタリック表示は『新式』から記述対象の語に後置される前置詞のみに限定せず記述対象を冠詞、接続詞に拡大した。接続詞への適応は疑問が残るが、日本人学習者の弱点である前置詞と冠詞に関する記述は高く評価できる。上述例のように類例を含み用例の整理は不可欠であるが、学習者にできる限り多くを提供したい編者の意向が強かったと考えられる。またボールド表記でも明記すべき語が曖昧な例がある(例:a throbbing pain in my eye)。さらに、イタリックの前置詞は見出し語とは必ずしも関連しない語で表示される

ケースも見られる(例:complain of a pain, a pain affecting only one half of the head, She suffers greatly from a pain in the back, I feel a prickling pain on the tip of my tongue)。他 にも見出し語と関連のない用例を提示するケースもある(例:This pain is enough to drive one mad)。このように苦労して完成した著作は必ずしも芳しい出来とは言えない。

上記の例で名詞として使用する際に併用しうる形容詞、名詞として主語あるいは目的語とする際に併用しうる動詞、また動詞として使用する際に併用しうる副詞の用例あるいは可能性に関して十分な情報は提供されていない。特定の語だけに焦点を当て用例収集をすることがない限り、個人の収集できる資料は量(と質)が限られ、得られた資料を適切に整理する必要もあり、最終段階の編纂で取捨選択も強いられるため、全ての見出し語に画一的に同等の情報が記載されるとは限らない。入江が数多くの様々な資料を効率的に整理し、編纂しても必ず盲点があり、欠如する情報が山積する可能性は高い。拙稿(2012)で言及した勝俣は自身が実質的に熟語辞典の基礎を作り編纂にかかわった経験から分類できていた点が入江とは異なっている。しかし、二人は同時期に個別の語の使用に関心を抱いていたことは明白である。勝俣は入江とほぼ同時期に連語の収集を始め、自身の著作で資料を活用し、活用大辞典の編纂へと至ったが、入江の著作とはほぼ四半世紀の隔たりがあり、勝俣の著作が圧倒的に支持されたのもその名声と記述の内容量からごく当然である。連語の概念を説明する用語を入江は使用しなかったが、連語辞典と捉えられる著作を勝俣に先行し出版したことには大きな意義がある。

史的には入江(1915)に先行し勝俣(1911)が出ている。勝俣はその序で次のように述べている。

「本書の目的とする所は英語中文法及イディヲムに關係深くその用法複雑なる冠詞、前置詞、接續詞、代名詞等を詳説し適切なる例を掲げてその應用を知らしむるに在りて…本書は難句の中心たる語を秩序的に説明したる點より見れば難句大辭典にして又文法及イディヲムの機關たる語を網羅詳解したる點より見れば一大應用文典なり」(p. 1)

勝俣(1911)の執筆における参考文献、資料の有無に関しては未調査のため本稿では言及しない。勝俣(1911)は上巻としたが下巻は刊行されなかった。勝俣(1911)では最も基本的な重要語が対象となり品詞、語義、用法とその用例を付し解説した「英文法辞典」の性格が強く、入江より詳解で使用者に分かりやすくなっている。後述するように入江が勝俣の著作を全く知らなかったとは考えられず、入江(1915)の編纂過程で参照できた可能性はあり、一部の用例から検証可能である。しかし、『詳解』『袖珍』の編纂に係っていた入江には勝俣に見られる語の詳細な記述を組織的に示す余裕はなかったと思われる。入江が時間を十分にかけ、懇切丁寧な編纂をしていれば勝俣(1911)と勝俣(1939)の中間に位置する大きな存在になり、語学的な記述と用例提示が可能になったと推測できる。

入江が当初は著作を『英文法辞典』と称した一因は、見出し語の構文 (文法的連語 grammatical collocation) を示す目的もあったためと思われる。動詞 cause や prevent の用例はそれを示している (cf. enable)。

What cause you *to be* **acquainted** *with* him?/ caused him **anxiety**, much **anxiety**, much **inconvenience**, heavy **loss**, much **trouble**, **sorrow**/ The speech caused much **discussion**/

caused his parents a great deal *of* **distress** *by* his dissipation/ What caused **earthquakes**?/ Heat caused water to **evaporate**; The rain caused the river to **rise**

本稿では比較のため最新版の英英学習辞典の語義と用例を示す。両者の比較から入江の先見性がわかる。語義はなく使用者が理解しにくい難点はあるが、用例の有効性は明確である。 cause (verb) to make something happen, especially something bad or unpleasant: *Do they know what caused the fire?* / Are you causing trouble again? / deaths caused by dangerous driving / The bad weather is causing problems for many farmers / The project is still causing him a lot of problems / The poor harvest caused prices to rise sharply. (OALD 9 2015)

ここで語彙的連語の典型例として拙稿(2012)でも取り上げた名詞 attention で入江が挙げる動詞 31 語と determiner を除く形容詞 20 語を抜き出し、現代の連語辞典と比較してみる。アステリスクの動詞 13 語、形容詞 12 語は現代の辞典に記載はなく、下線付き動詞 12 語、形容詞 13 語は勝俣(1939)でも示された語である。入江に類似するネイティブスピーカー向けの Badger & Rodale(1937)および Ehrsam & Rodale(1940)の記述との比較では、ask, invite, request, take を除く 27 の動詞、半数の形容詞(ボールド体表記)はそれぞれの辞書にも記載がある。入江は勝俣や Badger & Rodale、Ehrsam & Rodale とは二十年以上も先行し独力で編纂した辞典ではあるが、動詞と名詞、形容詞と名詞の連語を理解しやすいよう工夫した一世紀前の当時では優れた連語辞典と考えられる。

*call, 動詞 *arrest, *ask, attract, *bestow, bring, *claim, command, concentrate, demand. devote, direct, distract, divert, draw, *engage, *fix, give, *invite, merit, need, pay, receive, *relax, *request, require, *stimulate, *take,

形容詞 considerable, *adequate, careful, close, *entire, *exclusive, *great, immediate, *due, *pointed, *minute, *officious, particular, undivided, serious, special, *steady, *unremitting. *unwearied, *whole

さらに入江の特徴と言える副詞の扱いに簡潔に言及する。副詞は exactly、immediately, utterly 等の他に a の項で次の見出し語がある。このうち勝俣での見出し語は agreeably のみである (類似の例もある)。

absolutely, adversely, agreeably, alternately, anciently, apparently, assuredly, awfully 本稿では勝俣にもない closely の用例を挙げておく。

adhered closely to the original/ He is closely related to.../

He closely **resembles** his father/a closely kept **secret**/ to **translate** closely

現代連語辞典でも通常は副詞を見出し語にすることはなく、動詞、形容詞(まれに副詞)が見出し語となり連語を示すが、入江は副詞を見出し語として例示している。closely では 二例(a closely guarded secret/ translate literally [correctly])を除き現代でも通用する表現を副詞でも提示している点は、日本人学習者向けの辞典として高く評価されてよい。なお見出し語 relate と resemble で重複した記述が見られる。

入江が勝俣(1911)を一部で参考とした可能性に簡潔に言及したい。勝俣で記述対象とした語を a の項目のみ挙げる。その多くが重要な基本語であることは明確で、品詞、語義、用法、成句、その他等に分類し、入江の著作に近い。用例も多く分かり易さを打ち出している。

a, about, above, according, accordingly, across, after, afterwards, again, against, ago, ah, aha, albeit, alike, all, almost, alone, along, already, also, although, altogether, always, amid/amidst, among/amongst, and, anent, another, any, apropos, around, as, at, athwart, away

勝俣(1911)と比較すると入江(1915)は品詞表示が必ずしも適切でなく、用例重視でスペースを多く割くため語義や文法の詳細な記述はない。用例で学習者に「平生多く使用せらるゝ語の大體の用法」(諸言)が伝わると入江は考えていたと推測される。しかし、品詞区分を十分理解し、語義と用法を理解できる使用者ばかりとは限らず、使用者の文法の理解を含む英語力に依存する結果となったことは否定できない。

ここで指摘するのは、上述の語で勝俣(1911)と同一あるいは類似する用例が入江(1915)で部分的ながら見られることである。その中でも下記に示した already は顕著な例である。

	勝俣(1911)	入江 (1915)
1	Light the lampIt is lighted already.	It is lighted already.
2	Before this letter reaches you, you will	Before this letter reaches you, you will
	have already reached home.	have already reached home.
3	Does he seem to be recovering?—	He himself was there already.
	He has almost recovered already.	

さらに顕著な例に against があり、ここでは文形式になる同一例・類似例を挙げておく。

Keep your swords bright against the **day** of battle/Against the **house** there stands a tree/
I know **nothing** against him/Four students have **passed** this year against three last year/
It is true that she has no beauty, but against that you may **set** her wit/

The outline of the mountain was clearly drawn against a bright blue sky.

上記の二語は顕著な例だが、入江が勝俣の著作を日本人向けの英語参考書として優れている点を認め、入江自身が収集できない用例として勝俣を剽窃したと考えられる。これは入江の評価を貶める結果であるが、二十世紀前半における著作権に対する意識のあり方は甚だ希薄であった証拠でもある。

既述の pain の勝俣における記述は下記のように、他動詞と自動詞の区分はなくアルファベット順に用例を示しているが、入江と比較し利用者の便宜を考慮し検索しやすくなっている。

v. (verb) ②④ allay the pain/ bear the pain/ The pain has abated.

q.(qualifier) ① The pain is so acute/ a dull pain

p.(preposition) 35 a pain in the ear/ He cried with pain

この章のまとめとして入江 (1915) の問題点を指摘する。入江は初級学習者から上級学習者までが利用可のであると考えていたかもしれないが、英語を用いての受信と発信では必要とされる語彙もその数も同一ではなく、後者は制約がある。入江が語彙自体をどこまで詳細に研究していたか不明であるが、収集例をアルファベット順で英和辞典のように提示するのが学習者には利便性が高いという独断があったのかもしれない。その点からは、下記の見出し語および用例の選定は特に重要である。

1. 見出し語

主たる対象である名詞、動詞、形容詞の他に、副詞、過去分詞形の形容詞(adapted)、現在分詞形の形容詞(surprising)を見出し語扱いとする記述は日本人学習者を配慮したと考えられ望ましい。しかし Jinrikisha(人力車)や Heishi(平)等の日本語も記載し、一方で固有名詞(U.S.A., Newton)と固有名詞の形容詞形(Italian)、文法用語(Auxiliary)、外来語表現(Ad interim)も記載し、見出し語の記載は組織的とは考えられない。記述対象を明確に絞り切れなかったためと考えられる(勝俣も jinrikisha あり)。受信と発信のための語彙は全く同様ではないため、勝俣の言う active vocabulary を入江はどの程度まで認識できていたか疑問である。6)

2. 品詞区分

形容詞 serious の見出しで seriously, seriousness を用例で示すように、品詞と用例の不一致が見られる。改訂版で品詞表示は改善されたが、初版では品詞別とは限らず用例を羅列している。使用者の品詞の理解が前提となり、品詞別のない見出し語では用例を詳細に理解できないと十分に有益な情報が得られない。

3. 用例

語の用法の最適な情報提供は入江自身が諸言で述べているように用例提示にある。利用者の理解にとり優先すべき記述である。用例なしの単なるパターンの表示は無益とは言えないが、主語、目的語、後置前置詞さらに構文の例示が皆無では学習者には語の活用は極めて困難である。収集資料に適切な用例が必ずしもないことが要因と想定されるが、用例の意義をより慎重に検討すべきであり、見出し語と用例の不均衡は疑問である。

既述のように記載項目の用例の単純なアルファベット順提示は疑問の余地があり、類似例を多く記載する一方でボールド表記も必ずしも的確と言えない。用例の重要性に鑑みその数と提示例に関してより適切な取捨選択が望ましかった。しかし、重複する見出し語での用例提示は語の基本的な使用法の現地解決主義という使用者に最も便利で有益な編纂方法を採用していることも否定できない(例 severe の項で a severe pain を提示 cf. headache)。

4. 連語の区分

語彙的連語と文法的連語の明瞭な区分がない。連語の概念そのものが発展途上にあり仕方はないが、少なくとも語句レベル(語彙的連語)と文レベル(文法的連語)の区別が望ましかった。しかし、入江の両者の区分に関する意識の有無は不明確であるが、重要性を認識し網羅的な記述を試行した点は評価すべきである。

5. レーベルの無表示

本文前の品詞とレーベルの表記に関しては、前者は不十分ではあるが、後者の表示が筆者

が見た限りではなかった。少なくとも語句、文のいずれのレベルにおける表示なのかを含め、 使用者には理解に苦しむこ記述となっている (cf. lift n.)。

過去分詞形や現在分詞形を動詞の項で提示するのか、独立の見出し語で提示するかは編者の意向が優先することになるが、いずれが使用者に便利でまた有益であるかは語の頻度や検索の便宜性にもよる。このように長所と短所の判断が困難なことはあるが、基本語と考える語に関し語彙的連語と文法的連語の網羅的記述を試行した入江(1915)は極めて現代の学習辞典の性格に近いことが分かる。また、入江は後の勝俣(1939)の編纂に部分的ながら影響を与えていることも指摘する必要がある。

7 入江祝衛『英文法辞典』(1915) と勝俣銓吉郎『英和活用大辞典』(1939)

斎藤と勝俣の業績は Dohi et al. (2004) と拙稿 (2012) で言及したが、ほぼ同時期を生きた英語の達人として興味深い事実がある。入江が携わった『新式』の編者である新渡戸と高楠は海外留学の経験があり、井上も同様であるが、勝俣も入江も(斎藤と同様に)経験は皆無である。しかし、ネイティブスピーカーから英語を学ぶという貴重な経験があった。そして入江と勝俣は発信のための英語使用が原点である。著作においても勝俣は『ABC 会話』(1902) から始まり『英和活用大辞典』(1939) の集大成へと至った。同様に、入江は当初は独語や仏語の学習機会を得て、独語会話の共著(1903)が出発点となり、後に必死に英語を学んだ。『新式』の校正に短期ながら関与し英語表現の重要性を認識し、後に和英辞典から辞書編纂に携わった経歴の持つ意味は大きい。二十世期初頭から語の用法に強い関心を持った点も二人に共通している。

著作の刊行は勝俣(1911)が先行した。この著作が入江(1915)に影響を与えたことに疑いの余地はないことは上述した。以下で入江(1915)が勝俣(1939)に部分的に影響していることに言及する。

勝俣(1911)と勝俣(1939)にはほぼ四半世紀という出版年月の開きがあり、後者が見出し語、記述の体裁、記述量、正確さ、利便性を考慮し、前者と比較し大きく進展していることは明白であるが、入江(1915)が与えた影響に言及する従来の研究はない。本稿では記述の中核である見出し語と用例に関し両者の比較の結果を述べる。

1.見出し語

入江 (1915) の見出し語と勝俣 (1939) のそれを比較する。調査した範囲は a ~ absurdity、each ~ emanate, O(h) ~ of, sack ~ saying に記載の各 50 語で計 200 語となり、入江 (1915) で約 33 ページを占める。入江 (1915) は 1304 ページの著作で、見出し語総数は推定 7800 語である。比較対象の勝俣 (1939) は 1938 ページ、入江の約 5 割増しのページの著作で、活字の大きさ等も異なり記述量はかなり多いと判断される。比較した結果は表3の通りである。®

表 3 入江 (1915) と勝俣 (1939) の見出し語の比較

	A	Е	О	S
入江・勝俣に共通の見出し語	36	44	46	45
入江のみの見出し語	14	6	4	5
勝俣のみの見出し語	17	54	21	23

両者に共通の見出し語 171 に対し入江のみの見出し語 29 となり、勝俣に新出の見出し語は 115 となり、勝俣が見出し語をかなり増強していることが明確になる。表 3 からは、四半世紀後に刊行された勝俣の活用辞典では見出し語の選定において入江 (1915) を参照した可能性が高いことがわかる。勝俣が二十世紀初頭から語の用法に関心を持ち資料収集をしていたことは拙稿 (2012) で述べた。勝俣 (1939) では勝俣 (1911) で記述できなかった数多くの主要語を対象として編纂に挑んだと考えられる。その際の参照物の一つは入江 (1915) と考えられる。既述のように二十世紀前半は著作権への意識は極めて薄く、勝俣が入江 (1915) を自身の著作の編纂において先行する類似の著作と考えたとしても不思議ではない。その結果、表 3 が示すように見出し語の選定で一致が多いと考えられる。

勝俣の補充した語は品詞の違いの同形語(abandon)、関連する別品詞の見出し語(abortion)、派生語 (abandonment) 等が多いが、e の項は他と比較し補充が多い。四半世紀の間隔があり見出し語の増加は至極自然な流れであるが、入江が扱う連語情報をさらに強化し、数多く収録した点で勝俣の利便性が高まったと考えられる。下記は勝俣での新出の見出し語の一例である。勝俣は序で Badger & Rodale (1937) に言及しているが、用例辞典として参考にはできなかったと思われる。

early, economical, economize, editorial, efficient, elaborate, elastic, elevator, eliminate, eloquent

入江も勝俣も自著の序で述べているように、十年以上にわたる日頃の収集例を基盤に編纂 し、相互に記述の剽窃は見られるが、当時の著作として「造った字書でなく、出来た字書」(勝 侯 1939: 序)になったと言ってもほぼ間違いない。

2. 用例

用例は勝俣(1911)の序で言及するように英語表現に利用する発信型辞典においては最も重要な位置を占める。とりわけ基本的な語法・用法に不慣れな二十世期の学習者にとりその存在意義はいくら強調しても強調しすぎることはない。勝俣と入江は用例収集に絶えず心を配り、学習者にとり有益と考える用例の提示に工夫を重ねてきた。しかし、用例収集には、たとえ協力者がいたとしても、限界がある。見出し語の収録数を多くしようと試みるほど、その実証のために収集すべき用例数が一般的には膨大になり、その後の整理と編集作業自体も困難になることは容易に想像できる。かつて『オックスフォード英語大辞典』の編纂主幹であったマレーが用例収集(協力)者は卑近でない語により強い関心を示す傾向があると指摘したように、用例を書き写し、整理し、選択し、提示する編集作業は極めて困難な作業である。そのため、全てが一人で、あるいはチームで収集できるとは限らない。その結果、剽窃と捉えられる行為が著作権の意識の低い二十世紀前半において通用していたと考え

られる。褒められた行為ではないが、二十世期前半では編纂者の経験が大きな影響を持っていた。日本人学習者に特有の表現における誤謬の特徴は、現在は徐々に検証が可能となってきたが、一般化は二十世紀前半では無理であった。しかし、英語表現の向上には模範的な用例を提示し、模倣し活用するのが最も容易である。用例の重要性は二十世紀前半においても十分に認識されていた。ただ、その手法が現代とは異なっていた。

入江(1915)の勝俣(1939)に対する部分的な影響の検証を補強するため、両者の用例を入江に記載された該当語を対象に勝俣と比較した。調査項目は abandoned ~ accusation で accurate と accusation を除く共通の 28 語である。上述の入江のように勝俣が剽窃したと判断できる顕著な用例数は少ないが、その一因は勝俣は用例数が入江と比較し全般的に多く比較は困難なためである。ここでは明確な剽窃と判断できる用例を引用する。

見出し語	入江(1915)	勝俣(1939)	
abstain	to abstain from luxuries	abstain from food	
	to abstain from quarreling	abstain from flesh and fish	
	Abstain from speaking ill of others	abstain from luxuries	
	must entirely abstain from wine	abstain from speaking ill of others	
	Abstain from all wrong	【類例】 abstain from quarreling (wine)	
accede	accede to my proposal	accede to his request to	
	acceded to my request	He acceded to my proposal.	
	acceded to the throne	accede to convention	
	【註】acceded to a large estate では	accede to the throne	
	succeeded の方宣し		

この二語は同一あるいは類似が顕著な例であるが、a の項の調査から勝俣で入江と同一あるいは類似する例がないと判断される見出し語は abandoned ~ according の 28 語で 4 語と少数である。中でも顕著な例を含む語は他に abatement, abhorrent, abide, absorbed, accordance 等がある。

視点を変え入江のみに示された用例を基準に勝俣に見られる同一例あるいは類似例の有無を調査した。調査した項目は eager \sim endurance σ effectively, emulous, endued を除く 27 語, obedience \sim operation σ obstructively, offensively, officiate, onslaught を除く 26 語、sacred \sim side σ serviceable, shocking を除く 28 語である。その結果 e で 18 語、o で 23 語、s で 22 語に同一例または類似例の記載があると判断される。中には前置詞のみを明記し用例提示をしていない入江の不適切な記述を勝俣が剽窃した語として effective, elicit, eligible がある。判断が困難なことも多い。しかし、少なくとも全く同一資料から用例収集していたと仮定すれば、この状況が発生する可能性がなくはないが、そのような事態は考えにくい。その点から、入江(1915)は勝俣(1911)を一部剽窃し、勝俣(1939)は先行する入江を剽窃する結果となったと判断できる。

入江も勝俣も自らが長年の月日をかけ収集した用例から、英語表現に不可欠な参考図書と

して入江 (1915) と勝俣 (1939) をそれぞれ編纂した。二十世紀の初頭に入手可能であった英語の書籍や新聞・雑誌から数多くの基本語と考える語の使用例を限なく探す努力を日頃から実践した結果として出来上がった著作であるが、先行する辞書や競合する辞書よりも新しく出版された「より良い辞書」として広告するためには、用例提示においての競合相手を圧倒せざるを得なかったと思われる。辞書として競争相手と見做していなかったかもしれないが、より良い商品として販売できるように、互いを暗黙に認め合い、優れた点を活用したと考えられる。その点で、勝俣 (1939) は英作文において有名な著作とされているが、勝俣に四半世紀も先行する入江の著作の存在を忘れてはならない。

8 まとめ

明治から大正の当時に英語教師として有名であった齋藤秀三郎と入江は生没年(1866~1929)が同じである。斎藤は英語学校を経営し、著作も多く、現在でも著作が販売されるほどである。また勝俣(1872~1959)と和英辞典の共著者の山口は英語学習専門誌で「英語大家」と評された人物である(勝俣は『英語の日本』9巻16号と17号(1915)、山口は9巻19号(1915)参照)。一方の入江は独語、仏語にも精通し語学の達人であったには違いないが、著作は斎藤、勝俣ほど多くなく、一人の辞書編纂者として人生を捧げたと言って過言ではない。実弟に辞書の出版を依頼されたが、順調に進まず、今回取り上げた『英文法辞典』も「辞書編纂苦心談」(30)によれば少なくとも三人の校正協力者がいたが慎重な編集がなされたとは言えない。『袖珍』でA.メドレーの協力を得ながら『詳解』と『英文法辞典』で入江が最も傾倒したネイティブスピーカーの協力が皆無だったのは不可解であり惜しまれる。

史的に遡れば勝俣(1911)が重要語の解説を語義と用例で示し、その後の勝俣(1915)は見出し語の数を増強し品詞表示はなく用例辞典の性格を持たせた参考書として刊行された。さらに勝俣(1920)は名詞と動詞の idiomatic combination を示した参考書である。その後に名詞と形容詞、動詞と副詞、形容詞と副詞の現代コロケーション辞典の先駆となる勝俣(1939)の集大成へと至った。勝俣は拙稿(2012)で言及したように原型と考えられる神田・南日(1909)編纂への貢献が基盤にあった。しかし、語彙的連語を主たる連語の記述対象と捉えた勝俣と比較し、入江は語彙的連語だけではなく文法的連語も記述対象とし、連語の明確な概念提示はないが英語の基本語法に両者を含めた。著作や論文等により入江が連語により明確に言及していれば、連語の概念と実践が明確に検証できたと思われる。辞書編纂に命がけの多大な貢献をしながら、自身の著作や論考が多くはなかった。

勝俣とほぼ同時期に数多くの用例を収集し、入江は類似する辞書の編纂を企画した。しかし三省堂の斎藤のような強力な社内編纂協力者がいたわけでなく、全てが一個人による作業で成立しており、多くの困難を伴ったのは当然である。しかも個人による編纂は誤謬を招く危険も増大するだけでなく、語彙や用例の選択では主観的にならざるを得ない。とりわけ『英文法辞典』の出版に当たり英語教師、研究者が入江の著作をどれだけ正当に評価したかは疑問である。入江は斎藤や勝俣と比較し不利な立場にあった。優れた辞書がよく売れる辞書であるとは限らないことを入江(1912)からも知ることができる。

外国語を死に物狂いで学習し苦労しながら生涯を辞書の編纂にささげた入江祝衛は主として発信型辞書の編纂に携わったと言ってよいであろう。そのために収集した資料を基盤に、校正協力者はいたがほぼ独力で完成したと言っても間違いない。入江(1915)は勝俣が著作(1939)の編纂に当たり参照したことは疑いのない事実であることは、一部の項目の比較から明白である。勝俣は勝俣(1911)の四半世紀後に、活用大辞典の出版に至るが、勝俣には勝俣(1915)や勝俣(1920)があったが、入江(1915)を無視することは出来なかったと推測される。その結果、見出し語の選定、用例の提示において、入江を剽窃せざるを得なかったと思われる。勝俣(1939)が本邦の連語(コロケーション)辞典の第一号と通常は考えられているが、辞典と称する著作としては入江(1915)が先行している。斎藤(1915)、神田他(1911)の英和辞典の陰に隠れた入江(1912)と同様に、勝俣(1911)と勝俣(1939)に隠れ入江(1915)も目立つ存在でなく、連語辞典として注目を集めることが多くはなかった。入江の辞書編纂に賭けた生涯から生み出された『英文法辞典』は、正当な評価を与えられるべき本邦辞書史における連語辞典の第一号と見做してよい。

入江が長生きすれば「辞書編纂苦心談」(41)で構想していた「和英大辞典」や「英和記憶辞典」⁽⁹⁾がどのような辞典になっていたかは興味深い。自身の編纂した和英辞典を発展させ、英語による発信に極めて重要で有益な連語に関する情報を多く記載した辞典が編纂されていたかもしれない。本邦辞書史の研究において入江祝衛の孤軍奮闘による著作は再評価されてしかるべきである。

註

- * 本稿で引用のみは旧漢字、旧かな使いとする。
- (1) 未見のため参考文献に挙げていない A. メドレー、入江祝衛『モダーン和英辞典』(有 朋堂、1925)を含め五冊となる。他に単著として『日本俗語文法論』(有千閣・尚文館、 1902)がある。
- (2) 入江の和独辞典への関与は現物が未見で検索不可能なため検証できていない。ちなみに、三省堂の独和辞典第一号は高木甚平・保志虎吉『独和新辞林』(1896)で、斎藤(1991:87)の記述から A Compendious German and English Dictionary (1877)を底本に斎藤自身が原稿を作成したことになる。また、斎藤 (1991:86 87) は入江に和英辞典(斎藤の『英和辞典』の記述は誤謬と考えられる)の担当をさせたのが「明治二十六年の復興と共に」とあり、1890年代に三省堂が入江の東北学院着任前後に依頼していたことになるが、これが『新式』とは別辞典か否かは明確ではない。斎藤が言及する故事熟語辞典は1902年に出版されたが、入江は1903年に上京後に『新式』の校正に関与している。
- (3) 入江の「辞書編纂苦心談」の電子複写が、入江が入学した明治学院大学の図書館の貴重資料庫に保存されているとネット検索でわかる。
- (4) 『中外英字新聞』第19巻19号 (1911年4月15日) で刊行前に語数約八万、用例約 五万と宣伝し、賞文館が予約注文の広告を出している。再販 (1913年8月)の発行 者は実弟の井上太兵衛 (賞文館) で発売所が博育堂だが、標題紙に博育堂とあり出版

社と勘違いするが、背表紙には Shobunkwan と明記されている。第六版(1915年10月)では発行者が賞文館井上太兵衛と小川琢三(博育堂)と表記され共同出版の形態となっている。この六版の奥付には大正三年版と記され、大正三年(1914年)二月に発行された第三版から共同出版になったのかもしれない。

- (5) 『英文法辞典』(博育堂、1915) は 1918 年 9 月に『英作文辞典:全』と改称し、英語タイトルも A Dictionary of English Composition と変更され有朋堂から発行された。その後 1925 年に『改訂英作文辞典:全』A Dictionary of English Composition (Revised Edition) (有朋堂) で本文 1391 ページとなり、戦後復興版 (1953) 以降の版も同様である。改称の理由を大正7年7月の「諸言」で次のように述べている。「此辭書は英文を書く時に言葉の用法や其文法的關係を一目瞭然たらしめるのが主眼であるから名を英文法辭典 (A Grammatical Dictionary of the English Language) と命じて公にした(大正四年九月)所此名では單に文法的術語などの定義を羅列したもののやうに思はれ未だ内容の實際を示すに足りないから宜しく英作文辭典と改題せよ勸める人が非常に多数であるから斷然書名を改めることとしたのである。」ちなみに、改訂版は体裁等の変更で、内容は著しく異なっていない。
- (6) 勝俣は『英語の日本』第9巻17号 (1915) の「英語大家歴訪録」(十七) の「英作文に就て」で「學生をして誤らしめない様な立派な辭書の出現を希望します。…入江先生の作文本位の辭書があって、甚大な裨益を與へて居るが、…入江先生の分も未だ研究の餘地ある様に愚考せられます。」と述べ、入江の著作は不十分と主張し、passive vocabulary(見れば解る辭書)と active vocabulary(英作文練習の辭書)の区分に言及している。
- (7) 勝俣 (1939) に先行し書名に「活用」と明記したのは勝俣の『英和活用五千句』(1920) で、「本篇に就いて一言」で「この研究は idiomatic English を話したり、書いたりしたいと心掛けるものには極めて重要なことであつて」とあり、発信のため英語の活用を記している。ちなみに、書名に「活用辞典」と明記した著作に林弘之『英和活用辞典』(松雲堂、1923) がある。林の著作は入江と勝俣の中間期に刊行されたが、未見のため本稿では言及できない。
- (8) CとLの見出し語 50 の比較でも同様の結果が出た(品詞別の見出し語を含む)。
 - C 共通の見出し 40 入江のみ 10 勝俣のみ 35
 - L 共通の見出し 46 入江のみ 4 勝俣のみ 41
- (9) 類似の辞典として佐久間信恭『英和記憶辞典』(東洋タイムズ社、1919)がある。

主要参考文献

[辞書](*国会図書館 近代デジタルライブラリーの資料)

[]利用した版の出版年。 タイトル等は現代の漢字に変更した。

入江祝衛『詳解英和辞典』賞文館、1912. [1913: 賞文館・博育堂、1915].

入江祝衛『英文法辞典』博育堂、1915.(『英作文辞典:全』有朋堂、1918 [1925].)(『改訂 英作文辞典:全』有朋堂、1925 [1929].)

英語教授研究会『実用和英新辞典』吉川弘文館、1906.

勝俣銓吉郎『英和例解要語大辞典』有朋堂、1911.

勝俣銓吉郎『英和根柢三千句』有朋堂、1915 [1918].

勝俣銓吉郎『英和活用五千句』有朋堂、1920.

勝俣銓吉郎『英和活用大辞典』研究社、1939.

神田乃武 他『新訳英和辞典』三省堂、1902.[1907]

神田乃武 他『模範英和辞典』三省堂、1911. [1915]

神田乃武、南日恒太郎『英和双解熟語大辞典』有朋堂、1909.

*クンツェ、R&入江祝衛『独和会話編』南江堂、1903.

斎藤恒太郎『和訳英文熟語叢』攻玉社、1886. [近代日本英学資料 第3巻『和訳英文熟語叢』 ゆまに書房、1995]

斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』日英社、1915.

ブリンクリー、F、南條文雄、岩崎行親『和英大辞典』三省堂、1896. [1904]

メドレー・A & 入江祝衛『袖珍和英辞典』有朋堂、1914. [1915]

*新渡戸稲造、高楠順次郎『新式日英辞典』三省堂、1905.

山口造酒、入江祝衛『註解和英新辞典』賞文館、1907.

Badger, Kingsbury and J.I Rodale. The Verb-Finder. Emmaus, Pa.: Rodale Press, 1937.

Benson, Morton, E. Benson, and R. Ilson. The BBI Combinatory Dictionary of English,

Third Edition. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 2009.

Deuter, M. *et al. Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Ninth Edition. Oxford, England: Oxford University Press, 2015.

Ehrsam, Theodore and J.I Rodale. The Adjective-Finder. Emmaus, Pa.: Rodale Press, 1940.

Mayor, Michael. *Longman Collocations Dictionary and Thesaurus*. Harlow, England: Pearson Education Limited, 2013.

McIntosh, Colin. *Oxford Collocations Dictionary for Students of English*, Second Edition. Oxford, England: Oxford University Press, 2009.

Rundell, Michael. *Macmillan Collocations Dictionary*. Oxford, England: Macmillan Education, 2010.

参考文献

会津常治、入江祝衛『例解 英語受験法』東京:博育堂、1915.

秋山繁雄『明治人物拾遺物語―キリスト教の一系譜―』東京:新教出版社、1982.

井上太郎『辞書の鬼:明治人・入江祝衛』東京:春秋社、2012

入江祝衛「亀井萬喜子刀自に就いて」『故亀井萬喜子刀自追想録』東京:三省堂、1928. 355-358 『英語の日本』1908-1917. 博文館. [復刻版『英語の日本』全11 巻 東京:本の友社、1998.] 斎藤精輔『辞書生活五十年史』東京:図書出版社、1991.

『三省堂書店百年史』東京:三省堂書店、1981.

清水浩三「入江祝衛ーその人となりと業績一」『東北学院英学史年報』第 16,5-56. 1995. 竹井一夫「東北学院 英学事始」『東北学院英学史年報』第 4 号,1-34. 1983.

- ---.「二人の英和辞書編纂者一千村五郎と入江祝衛一(その2)」『東北学院英学史年報』第8号, 1-62.1987.
- 土肥一夫.「勝俣銓吉郎と連語」『東京都市大学 共通教育センター紀要』第5号,107-125. 2012.
- ---.「1930年代英和辞典」『東京都市大学 共通教育部紀要』第7号,15-30.2014.
- *中原貞七『英語前置詞用法 附接続詞』東京:三河屋、1898.
- 永嶋大典「入江祝衛の回想録「辞書編纂苦心談」」『大阪大学教養部研究集録 外国語・外国 文学』14(2), 153-170. 1966. [再録] 入江祝衛編、永嶋大典解説『詳解英和辞典』 付・回顧録「辞書編纂苦心談」東京: 名著普及会、1985. 1-42.
- ---. 『蘭和·英和辞書発達史』東京:講談社、1970.
- 早川 勇『日本の英語辞書と編纂者』横浜:春風社、2006.
- ---. 『英語辞書と格闘した日本人』東京:テクネ、2014.
- 保泉 光子「入江祝衛」『学苑』14 (7)、36-47. (近代文学史料研究・外国文学編第 77 回) 1952.
- 町田俊昭『三代の辞書 改訂版』三省堂、1981.
- Dohi, Kazuo *et al.* Historical Development of English-Japanese Dictionaries in Japan (7): *Jukugo-Hon'i- Eiwa-Chu-Jiten (Saito's Idiomological English-Japanese Dictionary*,1915) by Hidesaburo Saito. *LEXICON* No. 34: 30-230, 2004.
- * Eastlake, F. Student's Mistakes in English: How to Avoid Them. Tokyo: Kanasashi Horyudo, 1905.